

Title	幼児を持つ母親の仲間関係と育児困難感：内的ワーキングモデル尺度を用いて
Author	中西, 美紀 / 岩堂, 美智子
Citation	生活科学研究誌. 3 巻, p.107-114.
Issue Date	2005-03
ISSN	1348-6926
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	『生活科学研究誌』編集委員会

幼児を持つ母親の仲間関係と育児困難感

—内的ワーキングモデル尺度を用いて—

中西美紀, 岩堂美智子

大阪市立大学大学院生活科学研究科

The relationships among child-rearing mothers and difficulties in raising children —Using internal working model scale —

Miki NAKANISHI and Michiko IWADO

Graduate School of Human Life Science, Osaka City University

Summary

A questionnaire-based survey was conducted on 281 child-rearing mothers, asking their views and satisfaction levels of their relationships with other child-rearing mothers and difficulties in child rearing. We used the internal working model (IWM) concept and scale to analyze the links between differences of the interpersonal attitude disposition of the mothers. There were significant differences in the views and satisfaction levels of the relationships of mothers with other child-rearing mothers and difficulties in child rearing. In addition, low satisfaction levels among mothers relationship raise only their “depression・anxiety” factor of difficulty in child rearing. With these results, it is suggested that mother’s interpersonal attitude has an effect on relationships among mothers and that satisfaction levels with relationship among mothers did not account for controlling their whole difficulty in childrearing.

Keywords : 育児中の母親 *Child-rearing mothers*, 母親どうしの仲間関係 *Relationship among mothers*, 育児困難感 *Difficulty in raising children*, 内的ワーキングモデル *Internal Working Model*, つきあい満足度 *Satisfaction levels of relationship*

I 問題

近年、「母親のもつ社会的ネットワークの広さ」が育児不安、育児ストレス抑制要因として注目されるようになった(田中 1997、加藤・小林 2001、大島ら 2001など)。^{1) 2) 3)} 子育て支援策においても、自治体が主催する育児教室や地域の子育てサークル等の仲間作りの場を母親達に提供し、母子の孤立を防ぐことが重要視されている。子どもの発達にとっても、他児とかかわることが有益であることから、共同子育てや相互扶助の視点は、今後ますます支援の一環として強調されていくと思われる。

一方で、1990年代半ばより、「公園デビュー」という言葉が普及し、母親どうしの関係の難しさが指摘されるようになった。本山(1995)⁴⁾は、公園内における母親どうしの関係に、力関係や、グループの排他的な要素がもたらす閉塞感が存在することを報告している。公園利用実態について調査した大野ら(1998)⁵⁾は、固定グループに入っていけない公園放浪型の母親がいることを述べている。神田らの調査(2001)⁶⁾でも、子育て支援事業非参加者の中に、「他の母親との交流に不安を感じる」母親がいることが明らかにされている。また、平成12年度幼児健康度調査⁷⁾からは、子育てサークル内の関係について「親同士の関係に気を遣いストレス」と感じる母

親が約11%、「子どもを比較してストレス」が約4.3%であると示されている。少数派ではあるが、有益であるはずの人間関係作りの場が、かえってストレスフルである状況が読み取れる。なお一方で、岩田(2000)⁸⁾は、ネットワーク型の母親であっても、育児上の心理的リスクファクターが低いわけではないことを明らかにした。これらの報告より、母親どうしの関係づくりに難しさを感じる母親や、ネットワークを持っていても育児の困難が軽減されない母親の存在が示された。このような母親達にとっては、仲間づくりへ方向づけられることが、新たな心理的負担となる可能性が考えられよう。では、どのような母親たちが、仲間関係づくりに難しさを感じているのだろうか。

本論文では、母親の対人態度傾向に着目し、対人関係のスタイルによって、仲間作りに影響を及ぼすのではないかという仮説を持った。母親の対人態度傾向を知る手がかりとしては、内的ワーキングモデル(IWM)の概念を用いることを試みた。内的ワーキングモデルとは、ボウルビイがアタッチメント理論の中で用いた他者—自己関係における認知構造であり、アタッチメント対象との持続的な相互交渉を通して人の内部に形成されるアタッチメント対象と自己に関する心的表象である。アタッチメント対象に関する心的表象とは、「他者は自分の欲求に対して、どの程度応じてくれる存在なのか」についての判断であり、自己に関する心的表象とは、「自分は他者からどの程度受け入れられている存在なのか」についての判断であるとされている。従来、乳幼児のアタッチメント対象との相互関係などの分野で用いられてきた概念であるが、詫摩と戸田(1988)⁹⁾によって、成人用に測定尺度が開発され、またアタッチメント対象以外の対人関係においてもこのモデルが適応するとされている(戸田 1991)¹⁰⁾。

以上の視点から、母親の内的ワーキングモデル(以下IWM)の違いによって、母親仲間関係の満足度やつきあい観、育児困難感に差があるかどうか、さらには母親仲間関係の満足度と育児困難感との関連について検討することを本論文の目的とする。

II 調査方法

1. 調査対象

大阪府内の私立幼稚園に在園する4、5歳児の母親150名(回収数128、回収率85.3%)と、大阪市内5ヶ所の保健福祉センターにおける乳幼児健診に来所した、1歳6ヶ月、3歳児を持つ母親379名(回収数153、回収率40.3%)、

計529名のうち有効回答数281、有効回収率62.8%である。

2. 手続き

幼稚園講演会時、また乳幼児健診日に、「育児に関するアンケート調査」と題した無記名による質問紙を配布、どちらも後日郵送にて回収した。

調査期間は、2002年5～6月。

3. 調査内容

調査内容は、母親どうしのつきあい満足度、つきあい観、育児困難感、内的ワーキングモデル尺度(IWM尺度)についてである。なお、2002年4月に大阪市立大学内親子教室にて行った予備調査(n=16)をもとに、質問項目を作成した。

a 内的ワーキングモデル尺度

本尺度は、乳幼児期の愛着パターン(安定型、回避型、アンビバレント型)に対応した3つのパターンを特性として捉え、各特性の個人内での相対比較によって内的ワーキングモデルの個人差を測定するように構成されている。安定型傾向を持つ者は、他者は応答的で自己は援助される価値のある存在である、との表象を持つ。回避型傾向を持つ者は、他者は拒否的で援助を期待できないため、これを補完するためにきわめて自己充足的な存在として自己を表象する。アンビバレント型傾向を持つ者は、他者に対して信頼と不信のアンビバレントな表象を持ち、自己不全感が強い。これら18項目を因子分析し、因子得点を抽出して分類を行った。安定型の項目として、「私はすぐに人と親しくなるほうだ」「気軽に頼ったり頼られたりすることができる」等、回避型の項目として、「人に頼るのは好きではない」「あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう」等、アンビバレント型の項目として「ちょっとしたことですぐに自信をなくしてしまう」「人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある」等が挙げられる。回答形式は、「非常によくあてはまる」から「まったくあてはまらない」まで6件法である。

b 母親どうしのつきあい満足度

友人・仲間とのつきあいの満足度を問う4項目を作成した。回答形式は「非常に満足」4点～「満足していない」1点の4件法で、点数が高くなるほど満足度が高まるように得点化した。

c 母親どうしのつきあい観

母親どうしのつきあいに関する考え方について、「お互い礼儀をわきまえて、ほどよい距離でつきあえる」「子どものしつけ等で、お互い気軽に考えを言える」「表面上のつきあいはあるが、なかなか関係が深まらない」「仲良しの集団があり、入っていけない雰囲気がある」「子どもの友達関係は親のつきあいによって決まる」の5項目を作成し、「そう思う」4点～「全くそう思わない」1点の4件法にてたずねた。

d 育児困難感

育児におけるさまざまな否定的感情を、恒次・庄司ら(2000)¹¹⁾の育児困難感の調査項目から抽出し、13項目を作成した。回答形式は、「非常にあてはまる」から「まったくあてはまらない」まで4件法である。

4. 分析方法

母親の内的ワーキングモデルタイプ(IWM)別に、一元配置分散分析を用いて母親仲間関係の満足度、育児困難感を比較検討する。また、育児困難感と母親仲間関係の満足度との関連について、重回帰分析を用いて検討する。なお、データ集計と解析は、SPSS7.5を使用する。

Ⅲ 調査結果

1. 属性について

母親の年齢は、20代50人(17.8%)、30代218人(77.6%)、40代13人(4.6%)で、有職率23.8%であった。子どもの兄弟姉妹の有無については、「いない」76人(27.0%)、「いる」203人(72.3%)、無回答2人(0.7%)だった。核家族255人(90.7%)、拡大家族26人(9.3%)、居住年数5年以内が68%である。

2. 尺度の検討

a. 内的ワーキングモデル尺度

18項目について主成分分析、バリマックス回転による因子分析を行い、固有値1.5以上の3因子(累積40.7%)を採用した。信頼係数においては、安定型は、 $\alpha = 0.81$ 、回避型は $\alpha = 0.68$ 、アンビバレント型は、 $\alpha = 0.79$ となり、高い信頼性が得られている。また、3項目の因子得点を算出したところ、安定型傾向が強かった母親は172名(61.2%)、回避型傾向が強かった母親は54名(19.2%)、アンビバレント型傾向が強かった母親は55名(19.6%)と分類された(Fig.1)。

b. つきあい満足度尺度

平均12.9点、SD=2.70、最小値4点、最大値16点となり、

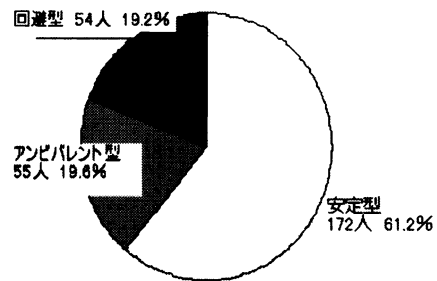


Fig.1 内的ワーキングモデル分類結果

4項目の信頼性係数は $\alpha = 0.79$ と高い値を示したので、これらをつきあい満足度尺度とした。

c. 育児困難感尺度

13項目について主成分分析、バリマックス回転による因子分析を行った結果、固有値1.9以上、累積46.7%の3因子を抽出した。因子負荷量の絶対値が0.4以上の項目を選定し、因子解釈を行うこととした。

まず、第1因子は、「子どもをとめどなく叱ってしまう」「子どものことがわずらわしくてイライラする時がある」「子どもに八つ当たりしては反省して落ち込むことがある」「最近、怒りっぽいように思う」の4項目に負荷量が高かったため、これらを「攻撃・衝動性」因子と命名した。第2因子は、「楽天的でくよくよ考えない(-)」「何事も敏感に感じすぎてしまう」「心配性であれこれ気に悩むことがある」「不安や恐怖感に襲われることがある」の4項目が抽出された。これらを「抑うつ・不安」因子と命名した。第3因子は、「子どもをうまく育てている(-)」「どのようにしつけたら良いかわからない時がある」「よその子と比べて落ち込んだり自信をなくすことがある」「子どものことは理解できている(-)」「育児に自信が持てない」の5項目が抽出された。これらを「困惑・自信のなさ」因子と命名した。また、3因子のピアソンの積率相関係数は、いずれも1%水準で有意であった。上記3因子の項目を「非常にあてはまる」4点～「まったくあてはまらない」1点まで、得点が高くなるほど困難感が高まるように向きをそろえて点数化し、分析を行う。

なお、因子分析結果はTable.1のとおりである。

3. IWM別による比較検討

a 母親どうしのつきあい満足度について

母親のIWMによる、一元配置の分散分析を行い、平均値の差の比較を行った。多重比較の結果、「子どもを誘い合って遊ばせる」「育児の心配事や悩みを話せる」「育

児以外の相談にのってくれる」では、いずれも、回避型<アンビバレント型<安定型で満足度が高くなっており、すべて回避型と安定型で有意差がみられた ($p < .001$)。「急な用事するとき子どもを預けあえる」のみ、有意差は見られなかった (Table. 2)。

b つきあい観について

Table.1 育児困難感項目の因子分析結果

n.o. は項目番号	因子1 (攻撃・衝動性)	因子2 (抑うつ・不安)	因子3 (困惑・自信のなさ)
5. 子どもをどめどめ叱ってしまうことがある	.7749		
9. 子どもをやつ当たりしては反論して落ち込めばある	.6648		
13. 腹膨らりっほいよよと思ふ	.6610		
6. 子どものことがわづらわしくてイライラする時がある	.6597		
10. 心配生であれこれ気に悩むことがある		.7762	
7. 何事にも敏感・怒りすぎてしまう		.5999	
4. 遠慮がてよく考えない*		.5889	
12. 不安や恐怖感をおそれることがある		.4770	
8. 子どものことは理解できている*			.6115
11. 育児に自信がもてない			.6077
1. 子どもをうまく育てていると思う*			.5888
2. どのようにしつたらよいかわからぬ時がある			.6055
3. よその子と比べて落ち込みたり自信をなくすることがある			.4888
固有値	2.048	1.169	1.068
因子寄与率	25.6%	14.6%	13.3%
累積寄与率	25.6%	40.2%	53.6%

* は逆項目

Table.2 IWM別のつきあい満足度結果 (平均値と標準偏差・F値)

項目	安定型	アンビバレント型	回避型	F値	多重比較
子どもを誘い合って遊ばせる	3.47 (.69)	3.25 (.89)	2.92 (.90)	10.26	注1
育児の心配事や悩みを話せる	3.57 (.66)	3.45 (.65)	3.20 (.69)	7.57	注2
急な用事の時子どもを預けあえる	2.87 (1.14)	2.74 (1.13)	2.67 (1.01)	.726	n.s
育児以外の相談にのってくれる	3.38 (.73)	3.21 (.77)	2.88 (.90)	8.07	注3

注1 回避型と安定型に0.1%水準で有意差
注2 回避型と安定型に0.1%水準で有意差
注3 回避型と安定型に0.1%水準で有意差

母親のIWM別に一元配置分散分析、多重比較を行った。まず、「表面上のつきあいはあるが、なかなか関係が深まらない」では、安定型<アンビバレント型<回避型の順で「そう思う」傾向にあり、安定型とアンビバレント型 ($p < .05$)、安定型と回避型 ($p < .01$) に有意な差が見られた。また、「仲良しの集団があり入っていけない雰囲気がある」については、安定型<回避型<アンビバレント型の順で「そう思う」傾向にあり、安定型とアンビバレント型 ($p < .001$)、安定型と回避型 ($p < .001$) の間で有意な差が見られた。「子どもの友達は親のつきあいによって決まる」では、安定型<回避型<アンビバレント型の順に「そう思う」傾向にあり、安定型とアンビバレント型の間に有意な差 ($p < .05$) がみられた。「礼儀をわきまえて程よい距離でつきあえる」「子どものしつけ等でお互い気軽に考えを言える」については、有意な差は認められなかった (Table3)。

Table.3 IWM別のつきあい観比較結果 (平均値・標準偏差・F値)

	安定型	アンビバレント型	回避型	F値	多重比較
礼儀をわきまえて程よい距離でつきあえる	3.74 (.47)	3.55 (.61)	3.65 (.63)	2.61	n.s
子どものしつけ等でお互い気軽に考えを言える	3.14 (.79)	3.04 (.77)	3.06 (.96)	.396	n.s
表面上のつきあいはあるが、なかなか関係が深まらない	2.28 (.73)	2.58 (.78)	2.66 (.89)	6.26	注1
仲良し集団があり入っていけない雰囲気がある	2.20 (.80)	2.94 (.90)	2.75 (.89)	18.69	注2
子どもの友達関係は親のつきあいによって決まる	2.43 (.81)	2.78 (.77)	2.53 (.86)	3.55	注3

注1 アンビバレント型と安定型の間に5%水準で有意差、回避型と安定型の間に1%水準で有意差
注2 アンビバレント型と安定型の間に0.1%水準で有意差、回避型と安定型の間に0.1%水準で有意差
注3 アンビバレント型と安定型の間に5%水準で有意差

c 育児困難感

母親のIWM別に一元配置分散分析、多重比較を行ったところ、3因子ともに有意差がみられた。まず、「攻撃・衝動性」因子では、安定型<回避型<アンビバレント型の順で得点が高く、安定型とアンビバレント型の間で有意差 ($p < .001$) がみられた。次に、「困惑・自信のなさ」因子でも、安定型<回避型<アンビバレント型の順に得点が高く、安定型とアンビバレント型 ($p < .001$)、回避型とアンビバレント型 ($p < .001$) の間で有意差が見られた。「抑うつ・不安」因子においても、同様の傾向が見られ、安定型とアンビバレント型 ($p < .001$)、回避型とアンビバレント型 ($p < .001$) の間で有意差が見られた (Table.4)。これらの得点分布について、Fig.2~Fig.4に表した。

Table.4 IWM別の育児困難感結果 (平均値と標準偏差・F値)

	安定型	アンビバレント型	回避型	F値	多重比較
攻撃・衝動性	10.04 (2.35)	11.78 (2.43)	10.80 (2.16)	12.05	注1
困惑・自信のなさ	11.43 (2.32)	13.93 (2.49)	12.06 (2.12)	24.23	注2
抑うつ・不安	8.73 (2.13)	11.00 (2.31)	9.17 (2.10)	21.19	注3

注1 安定型とアンビバレント型に0.1%水準で有意差
注2と注3 安定型とアンビバレント型に0.1%水準で有意差、回避型とアンビバレント型に0.1%水準で有意差

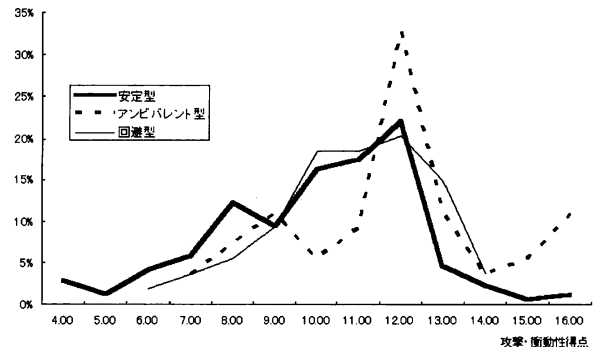


Fig.2 IWM別攻撃・衝動性得点

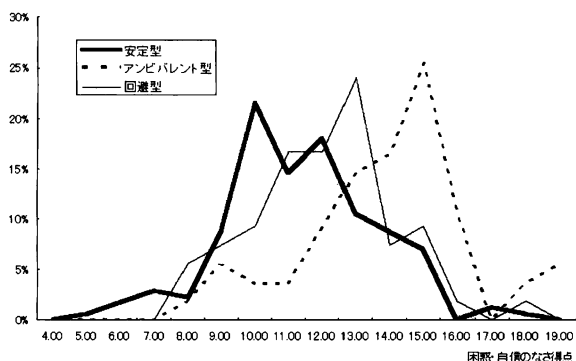


Fig.3 IWM別困惑・自信のなさ得点

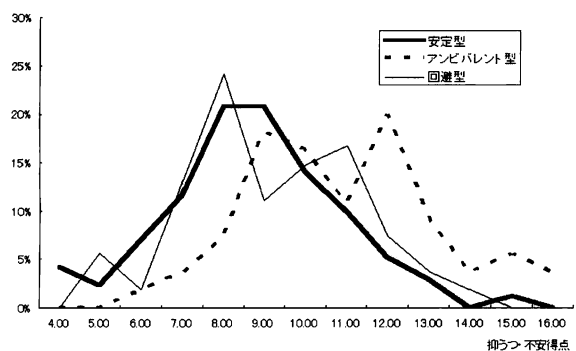


Fig.4 IWM別抑うつ・不安得点

Table.5 「育児困難感」3因子の要因となるIWMタイプ・つきあい満足度 (回帰係数β)

	攻撃・衝動性	困惑・自信のなさ	抑うつ・不安
調整済み決定係数 R ² F 検定	R ² =0.060***	R ² =0.133***	R ² =0.093***
F 値	6.578	14.399	9.924
独立変数	β	β	β
アンビバレント型	.266***	.386***	.298***
回避型	.073	.057	.050
つきあい満足度得点	-.038	-.016	-.120*

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

4. 育児困難感の要因

つきあいの満足度と母親のIWMタイプを独立変数、育児困難感の3因子を従属変数として、重回帰分析により、育児困難感の要因を分析した。まず、育児困難感3因子とも、回帰モデルに対するF検定は有意となった。「攻撃・衝動性」因子は、調整済みR²=0.060となり、有意なプラス要因として「アンビバレント型」(p<0.001)が示された。次に、「困惑・自信のなさ」因子では、調整済みR²=0.133となり、有意なプラス要因は「アンビバレント型」(p<.001)が示された。また、「抑うつ・不安」因子においては、調整済みR²=0.093で、有意な

プラス要因として「アンビバレント型」(p<.001)、有意なマイナス要因として「つきあいの満足度」(p<.05)という結果が示された (Table. 5)。

IV 考察

母親の内的ワーキングモデル (IWM) タイプの違いによって、母親どうしのつきあい満足度、つきあい観、育児困難感に、有意な差が示された。はじめに、母親どうしのつきあい満足度と、つきあい観について検討する。回避型傾向を持つ母親は、つきあいの満足度がもっとも低く、安定型傾向を持つ母親との間に有意な差が示された。回避型は、「人と親しくなったり、親密な関係になることを嫌い、他者を全面的には信用できない」という表象を持つことから、母親どうしのつきあいが距離のあるものとなり、その結果つきあいの満足度が低くなったと思われる。また、つきあい観について、「表面上のつきあいはあるが、なかなか関係が深まらない」とも感じている。回避型は、「好意的反応を示す人物に対して好意を感じてはいるのだが、相手からの好意や関心を低く評価しており、相手の反応にかかわらず、相互交渉を避ける傾向が見られる」という特徴がある。ポジティブであろうと、ネガティブであろうと、強い感情喚起に対して安全感が脅かされるため、情動が喚起されぬよう相手から遠ざかることがその傾向として挙げられている (戸田1991)¹²⁾。本調査結果からも「なかなか関係が深まらない」というつきあい観が有意に高く示された。回避型傾向の母親は、関係が深まらないと感じているものの、自ら関係性を求めて行動に移さない傾向にあるといえる。従って、回避型傾向の母親が他者と関係性を持つための支援を考えたとき、支援側の待ちの姿勢では難しいことが推察される。次に、アンビバレント型傾向の母親を見てみると、つきあい満足度については、安定型と回避型の間に位置することが示された。また、つきあい観について、アンビバレント型傾向の母親は、「仲良しの集団があり、入って行けない雰囲気がある」、「子どもの友達に親のつきあいによって決まる」の2項目が有意に高かった。アンビバレント型の特徴として、「自分に対する相手の反応に強く影響を受けて、相手からの好意や関心を極端に解釈する。好意的反応を示す者とは相互関係を強く望み、そうでない者とは極端に避ける傾向にある」ことから、本来、安心できる範囲での関係性を希求する傾向を持つと考えられる。換言すると、自分にとって安心できる関係性の中に入れないければ、最初のうちは不安が募るであろうが、入ることができれば不安は軽減されることが推測され

る。しかし、同時に、その関係性に必要以上の理想化を行ったり、関係性への没頭がなされる可能性も考えられる。このことは、公園仲間に入ると、まわりに過剰にあわせすぎて疲弊する母親が存在するという報告(本山1995)¹³⁾に合致すると思われる。

したがって、アンビバレント型傾向の母親に対する支援の形態としては、最初のうちは支援者が仲介するなどの配慮をしながら、母親たちが信頼感や安心感を少しずつ育めるように、慎重に行っていくことが有効であるかもしれない。

安定型傾向の母親については、つきあい満足度が最も高く、誘い合って子どもを遊ばせたり、母親どうしが育児や育児以外の相談事をするに満足を感じていることが示された。安定型の表象「他者は応答的で、自己は援助される価値のある存在である」と照合したとき、他者と程よい距離で、気楽に無理なくつきあえる状況が示されたといえる。これらの母親達は、地域に開かれた子育て支援のグループや仲間づくりに、積極的に参加しやすい傾向があるのではないだろうか。

これらのことから、母親が持つつきあい観や、仲間関係の満足度は、対人態度傾向の3タイプによって異なることが示された。母親どうしのつきあいに関しては、さまざまな立場があることを認識しておく必要があるといえよう。木脇(1998)¹⁴⁾は、今日の子育て行政に携わるものの中に、「健全育成は子育てサークルで」という図式ができつつあることを述べ、サークル活動をするのが理想的な子育ての過ごし方というイメージの捉え方をすると、「公園デビュー」が「サークルデビュー」に取って代わることになることと危惧している。本調査結果から示されたように、回避型傾向やアンビバレント型傾向の母親の中には、孤立を防ぐためのサポートがかえって心理的負担を増す場合が考えられるのではないだろうか。まずは支援者側の心構えとして、このような心理的傾向が存在する可能性を認識する必要がある。さもなければ、母親達を問題ケースとして特別視したり、誘っても乗ってこないことで放置される場合が考えられる。

次に、育児困難感について検討する。育児困難感の3因子全てにおいて、安定型傾向の母親が最も低く、回避型が続き、アンビバレント型傾向の母親が最も高い結果となった。特に、「困惑・自信のなさ」因子と「抑うつ・不安」因子については、回避型と、アンビバレント型の間にも有意差が見られ、アンビバレント型の母親達に顕著な育児困難感が示された。加藤(2001)¹⁵⁾の研究からも、アンビバレントタイプの母子相互作用を呈した母親にストレス耐性が弱いことが認められており、アンビバ

レント傾向の母親が子育てにおいて困難を感じやすいことがうかがえる。

育児困難感3因子が高まる要因としては、母親がアンビバレント型であることが示されたと同時に、困難感のうち「抑うつ・不安」因子が高まる要因として、母親のつきあい満足度が低いことが示された。

一方で、「攻撃・衝動性」因子、「困惑・自信のなさ」因子と、つきあい満足度との関連は見られなかった。このことから、母親どうしの仲間関係に満足することによって、抑うつ感や不安感が軽減される一方で、子育てに関連した攻撃性や衝動性の問題、困惑や、自信のもてなさについては、解消されない可能性が示された。すなわち、つきあいの満足度は、育児困難感全体の抑制要因としては機能しないことが示唆されたと言えよう。岩田(2000)¹⁶⁾が、「母親の社会的ネットワークが充実していても育児上の心理的リスクファクターが低いとはいえない」という結果を示したことから、つきあいの満足のみでは、解決しがたい困難感があると思われる。この結果をふまえて、母親どうしの仲間作りが子育てに及ぼす効果と限界についてより詳細に見ていく必要があるだろう。そのためには、つきあい満足感尺度の再検討及び、仲間との具体的なつきあいの内容を追加することや、育児困難感3因子を生活場面別、子どもの年齢別に見ていくなどの方法が考えられる。

V まとめと今後の課題

本研究の目的は、①母親の対人態度傾向によって、仲間づくりや育児困難感に影響がみられるかどうか、さらに、②母親どうしの仲間関係に満足することで、育児困難感軽減されるのかという問いに対するものであった。

冒頭で述べたように、現在の子育て支援の潮流として、母親どうしがかわる場の提供が積極的に行われている。その場においては、母親の対人態度傾向によって、仲間づくりに積極的に参加できる母親もいれば、そうでない母親もいることが示されたといえる。今後、仲間づくりという支援を有効に活用する際には、母親をひとまとまりに捉えるのではなく、母親の対人態度傾向をも考慮した柔軟性に富むメニューを用意することが有効だろう。まずは、仲間づくりに消極的な母親に注意深く目を向け、必要によっては支援者との信頼関係を育むことが望まれる。さらには、時間をかけて他者との関係づくりに取り組む場としての少数固定グループの拡充や、集団の閉塞性を打開する目的として地域高齢者や若年ボランティアが参加できる異年齢子育てグループの設置などが

挙げられる。

本研究では、母親の対人態度傾向という一視点から仲間関係を分析したが、仲間間の相互関係や、地域性などの視点も必要である。さらに、母親どうしの仲間関係づくりのみでは解消されない育児困難感について、インタビューや観察などの方法も加えて分析する必要があるだろう。

最後に、本調査では、健診や講演会に参加して、質問紙に記入できる母親が対象となった。今後、背後に存在する多様な母親に目を向けて、外出しない（できない）母親や、孤立しがちな母親への支援を考える切り口を探っていきたい。

引用文献

- 1) 田中昭夫：「幼児を保育する母親の育児不安に関する研究」乳幼児教育学研究 第6号 57p - 64p (1997)
- 2) 加藤恵子・小林真：「母親の育児不安とソーシャルサポート」富山大学教育実践総合センター紀要 No.2 45p - 50p (2001)
- 3) 大島博子・辻野美千代・江口緑・甲斐暁子：「母親が抱える育児ストレスの実態について—アンケート自由記述の分類検討から—」心の危機と臨床の知（甲南大学大学院人文科学研究科人間科学専攻学術フロンティア研究室編）第2巻 69p - 83p (2001)
- 4) 本山ちさと：『公園デビュー 母たちのおきて』DHC出版 (1995)
- 5) 大野正人・服部勉・進士五十八：「乳幼児連れの母親の公園利用実態からみた公園デビューに関する一考察」ランドスケープ研究 61 (5) 785p - 788p (1998)
- 6) 神田直子・山本理絵：「乳幼児を持つ親の、地域子育て支援センター事業に対する意識に関する研究—子育て支援事業参加者と非参加者の比較から—」保育学研究 第39巻第2号 80p - 86p (2001)
- 7) 平成12年度幼児健康度調査報告書 (社)日本小児保健協会『日本子ども資料年鑑2001』日本子ども家庭総合研究所・社会福祉法人恩賜財団母子愛育会編 KTC出版 13p
- 8) 岩田美香：『現代社会の育児不安』家政教育社 55p - 61p (2000)
- 9) 詫摩武俊・戸田弘二：「愛着理論からみた青年の対人態度—成人版愛着スタイル尺度作成の試み—」人文学報(東京都立大学人文学会/編 (196巻) 1p - 15p (1988)
- 10) 戸田弘二：「Internal Working Models研究の展望」北海道大学教育学部紀要,55 133p - 143p (1991)
- 11) 恒次欽也・庄司順一・川井尚：「いわゆる育児不安に関する調査研究(2)—最新版質問紙による「育児困難感」の規定要因に関する研究—」『愛知教育大学研究報告,49 (教育科学編)』125p - 132p (2000)
- 12) 10) に同じ
- 13) 4) に同じ
- 14) 木脇奈智子：「子育てネットワークに関する考察—子育てサークルの類型と今日的課題—」家族関係学 Non.17 日本家政学会家族関係学部会/編 13p - 22p (1998)
- 15) 加藤邦子：「母子の相互関係の3つのタイプのちがいは：3歳児の社会性への影響」家庭教育研究所紀要 No.23 121 - 130p (2001)
- 16) 8) に同じ

幼児を持つ母親の仲間関係と育児困難感

— 内的ワーキングモデル尺度を用いて —

中西美紀, 岩堂美智子

要旨：幼児を持つ母親281名を対象に、母親仲間関係の満足度、つきあい観、育児困難感に関する質問紙調査を行った。これらの調査項目について、母親の対人態度傾向の違いから分析するために、内的ワーキングモデルの概念を用いたIWM尺度をさらに調査に加えた。母親の対人態度傾向を表す内的ワーキングモデルタイプ（安定型、アンビバレント

型、回避型)別に分析したところ、仲間関係の満足度、つきあい観、育児困難感すべてに統計的に有意な差が示された。また、母親仲間関係における満足度の低さは、育児困難感の「抑うつ・不安」因子のみを高め、「攻撃・衝動性」因子と「困惑・自信のなさ」因子には影響しないことが示された。これらの結果より、母親どうしのつながりには、母親の対人態度傾向が影響すること、母親どうしの関係が満足できないものであっても育児困難感全般を高める要因にはならないことが示唆され、今後の子育て支援に必要な観点について考察を行った。